

《エレウシスのアンフォラ》の神話表現 —— 葬礼制度に基づく再検討

福本 薫 (筑波大学)

紀元前7世紀前半にギリシアのアッティカ地方で制作された《エレウシスのアンフォラ》(エレフシナ考古博物館)は、古代ギリシア美術史上、神話表現を試みた最古の大規模作例として知られる。アンフォラの正面に描かれた2点の英雄による怪物退治図は、幾何学様式期からアルカイック期にかけての、説話表現の試行的段階をよく示している。

先行研究では、本作が子供の甕棺であった点に重きを置き、神話表現を呪術的側面から解釈してきた。すなわち、英雄による怪物退治図を、被葬者のための破魔の役割を負う図像とするなど、甕棺であったという事実が解釈の起点をなしてきた。しかし、議論の前提となっているこの用途に関しては、再考を要するよう思われる。同時代の葬礼制度に照らし合わせた場合、大規模作例の甕棺は極めて例外的である。本発表は、陶器の社会的役割に関する近年の研究を手がかりに、これまでほとんど看過されてきた本作の用途について考察し、その神話図像がいかなる社会的要請のもとで制作されたかを明らかにしたい。

発表者は、《エレウシスのアンフォラ》は墓標陶器として制作されたと考える。紀元前7世紀のアッティカ地方では、成人と子供は葬礼において明確に区別され、一般に子供は無地の日用陶器の甕棺に納められて埋葬された。豪華な装飾陶器の甕棺は極めて少なく、加えて本作の胴部に、遺体を入れるための修復跡が見受けられることから、本作は元来の用途とは別に、甕棺として再利用されたと推察される。

本作を墓標陶器と考える積極的な理由としては、当時アッティカの墓をめぐる環境が著しく変化し、墓標の重要性が増した点を挙げるができる。この頃、墓穴に収められる副葬品は減少し、代わって墓を記念する塚と墓標が増加していった。このような視覚的効果を備えた墓は、ごく一部の upper 階級に属する成人に独占され、被葬者とその一族の権威発揚の場となっていったと考えられる。本作と同様式の図像や文様をとまなう装飾陶器の多くは、このような環境において、儀式陶器、あるいは墓標陶器として使用されている。また、この時期の墓標陶器には、片面に主たる図像を、反対面に装飾文様を配置して正面観を意識する特徴が看取され、片面に神話図を配す本作は、この傾向に合致する。

したがって発表者は、本作は上層階級の墓標であり、その神話表現は、彼らの権威を顕示するための図像であったと考える。このようにして、本作の神話表現は、紀元前8世紀に始まる英雄崇拜に基づく、尊い祖先としての英雄像と見なすことができるだろう。葬礼において示される英雄像は、自らの家系が勇敢な父祖に連なることを他者に提示する役割を担っていたのではないだろうか。古代ギリシア美術における神話表現の成立は、葬礼のコンテクストを考え合わせることによって、いっそう重層的に捉え直すことができると考える。